

手話のオラリティとアジアろうコミュニティでの社会貢献への応用～フィリピン手話について

Orality of Sign Language and its Applicability to Asian Deaf Community: An Example from Filipino Sign Language

齊藤くるみ

“Orality and Literacy” has been interpreted as technologizing of languages since Walter J. Ong (1982). Sign languages are languages without sound and letters. If so, are the concepts of orality and literacy not adaptable to sign languages? Or perhaps, are the concepts above not universal among languages? Sign languages were proved to be “language” in both linguistic and neuroscientific points of view. This report discusses the technologizing process of sign language, that is, the mechanism parallel with orality and literacy. In order to do so, I examine and point out the unique characteristics in FSL (Filipino Sign Language, or Philippine Sign Language) presentations.

Key words; sign language, orality, literacy

はじめに

言語を論じるときに、しばしばオラリティとリテラシーという概念が出て来る。オラリティ (orality) とは伝承とか口語というような意味である。oral は口頭・口述という意味で、ろう者に声で話すことを強いるやり方を口話主義というがこれは英語で oralism という。

私たちが日ごろ話しているのは音声つまり oral な言語であり、それを文字で書くことをリテラシーという。文字は、目で見えるものであり、つまりはオラリティは聴覚、リテラシーは視覚に言語をとどめることである。

手話は音声言語とまったく違う文法をもつ視覚言語であるにも関わらず音声言語と同じように脳の言語野で生成されていることが 1990 年代に明らかになった。手話の理論研究では「音素」という概念を使うことは既に常識であり、手話の音素や音韻論の存在は音声言語と手話が本質的には同じ「言語」であることの証明でもあるのだが、「音」ということばが含まれていることに違和感を唱える研究者もいる。それと同様に「オラリティ」と「リテラシー」という用語・概念、そしてオラリティからリテラシーへという理論は、手話研究においては大変違和感がある。手話は元来 oral なものではない。リテラシーは音声言語を「可視化」という大きな飛躍を意味するのであるが、その点では手話は最初から可視記号である。リテラシーが道具や技術で言語を記録したり、発話者のメタ認知を促すものとするならば、録画の技術はリテラシーと呼べないか。日本社会事業大学では「日本手話」を母語と

するろう者に手話動画で修士論文を提出することを認めた。これは一般でいうところの oral なものでも literal なものでもないが、この論文の言語、「日本手話」はオラリティもリテラシーも持たない言語と言うべきなのだろうか。

従来言われてきたオラリティは音声言語のみを想定して提唱された概念であり、聴覚モダリティから視覚モダリティへの転換がオラリティからリテラシーへの進化に必須であるかのように考えられてきた。そのことは言語の本質をつかみきれていなかったことを示すものである。本研究はオラリティとリテラシーの理論を見直すものである。また手話のオラリティ研究の過程で得られた資料はアジアのろうコミュニティのリスクコミュニケーション構築に寄与し、手話のオラリティの仕組みの解明で得られた知見は手話通訳者養成にも貢献すると考え、最終的に災害手話として有効なものを集め、国際協力に携わる人や手話通訳士、ろう当事者に発信し提供することを最終目標とする。

その中で今年度の研究成果としてはフィリピン中部東ビサヤ地方のサマル島カルバヨグおよびレイテ島のろう者とダバオのろう者の手話を題材として、オラリティとリテラシーの存在を探った。サマル島・レイテ島は2013年に巨大台風ヨランダの被害を受けた地域であり、とくにレイテ島のタクロバンは壊滅状態になった。この地域のろう者に被災体験の話をしてもらい、その手話を観察した。また都市部ダバオはサマル島・レイテ島に比べて特別支援学校等も整っており、教育を受けたろう者の手話を観察することができる。

本研究はその後4年間の文科省科学研究費補助金研究(特設基盤B)にひきつがれることになり、現在進行中であるので、本報告書ではその第一段階としてフィリピンの手話の観察から得られた知見を報告するものである。収集したのは20名のろう者の手話であるが、本報告書ではオラリティとリテラシーの研究からみて重要な教育的背景に注目して、典型的な例を4例挙げることにする。

## 1. 手話のオラリティとリテラシー

手話の言語性が認められる以前の理論研究はモダリティに惑わされて言語の本質を見ていなかった。重要なのはモダリティとコードの関係である。たとえば日本における状況を例に挙げると、ろう者は、日本手話(コードAとする)という特別な構造をもつ言語(視覚モダリティ)でコミュニケーションをとり、同時に自身にとっては聞こえたことのない、そして構造も手話と全く違う外国語ともいえる音声日本語(コードBとする)を文字(視覚モダリティ)だけで、十分ではないが、理解している。一方視覚障害者は日本語(コードB)を音声(聴覚モダリティ)だけで認知し、情報を得る人もいるが、それに加えて点字(触覚モダリティ)を使って情報を得る視覚障害者もいる。さらに盲ろう者は音声も認知せず、視覚記号も認知せず、音声日本語(コードB)を指点字や点字のみ(触覚モダリティ)で理解している人と、触手話(触覚モダリティ)で日本手話(コードA)を理解する人に分かれる。

日本語とはあるコード（コード B）を聴覚モダリティによって、生成し、理解するものであり、リテラシーとはそれを二次的に文字に変換したもの（コード B&視覚モダリティ）とされているが、視覚や聴覚に障害のある人たちにはそれがあてはまるとは言えない。最も興味深いのは、一見オラリティがなく、かつリテラシーもない（世界の手話には音声言語の識字と呼べるものはない。）「日本手話」は、言語ではないのか、という問題である。しかし脳科学では「日本手話」（音声を手指記号に変換した「日本語対应手話」ではなく）は、ジェスチャーを生成する部位と違う「言語野」で生成されている。手話は発せられてはすぐ消える線状（linear）の音声とは全く違う構造を持ち、手の形、動き、位置と眉上げや視線や頷きなどの記号が総合的に意味を構成するものであるし、静止した状態を作ることもできる。これほど異質な特徴を持つ手話であるが、音声言語の研究から生まれた音韻論は今のところ手話を分析することに成功しており、大幅な見直しを必要とされてはいない。つまり音声言語と手話は表面的なモダリティとは関係ない抽象的なレベルで言語の本質を同じくするのである。そもそも言語のオラリティとリテラシーは、言語の真実なのか。オラリティ対リテラシーとして論じられていたことは、手話を対象とすることによって修正を余儀なくされるのか。それとも言語の本質にオラリティとリテラシーという概念を置くことはモダリティに関係なく言語の本質として必然なのか。

視覚・聴覚に障害のある人々のもつ言語は決して言語として不完全とは思えない。そうであるならば、オラリティとリテラシーをモダリティに惑わされず、たとえば、リテラシーの本質は自然な発話から道具・技術によって二次的に記録されたもの、送信者・受信者が自分の意志で送信・受信の速度を変えられるもの、受信者と送信者の認知が同時的ではないもの、表現が固定されたもの等々という要素をもって考察しなおすべきである。

オラリティの研究は、W. J. Ong (1982) の *Orality & Literacy* に端を発するが、そこで彼は言語の原点がオラリティ、つまり音声による発話であるとしており、そもそも音声のない手話は想定していない。一方、リテラシーの出現は自己の意識の進化である（from “self consciousness” to “reflectiveness and articulateness about the self” and “highly personal interiority”）と Ong が言うときに、「見える」ことをその根拠のひとつとしているのであるが、手話は最初から「見える」ものである（Ong 1982）。続く研究者たちも、オラリティとは、文字通り言語を音声ありきとして議論を進めて来たのである。しかし、L. Polich はニカラグアで新たにできたろうコミュニティーとニカラグア手話の形成について研究する中で orality という概念がろう者を完全な人間ではないという印象を持たせる（“Orality is an ideology with ominous implications”）と指摘している（Polich 2001）。

手話研究により、言語学は修正を余儀なくされた。つまり「言語というのは人間が自然に生み出した、声で発し、耳で聴くものであり、それを視覚記号化した文字の言語は二次的なものである」という『常識』は間違っていたのである。日本手話やアメリカ手話のように、ろう者が自然に生み出した手話には「音」は存在しない。（日本語の音素や形態素を日本語のままの語順で手で表す「日本語対应手話」とは構造が違う。例：「彼は彼女が好きだ」は、

日本手話では「彼」(右手)というサインと「彼女」(左手)というサインを同時に表し、次に「好き」のサイン、次に右から左に向けた指差しを出す。)そして音声言語のように一つの口で一つずつ順に音素を発するような linear な構造と違う。この自然な手話を発したり、見て理解するろう者の脳の動きは、聴者がジェスチャーを発したり理解したりするときの脳の動きとは全く違って、聞こえる人が音声言語を発したり理解したりするときの脳と同じ活動をしている。これこそが『言語』であり、「音」と「言語」の必然性的な関係はなかったのである。

手話には「音素」がある。これは今や常識である。しかしこれは「音のない音素」である。手話にも「発音」の違いがある。しかしこれは「音のない発音」である。同様に「音のないオラリティ」があっても不思議ではない。

本研究により、「オラリティ」と「リタラシー」という概念・理論も修正を余儀なくされるのではないか。「オラリティ」と「リタラシー」は、言語と音声を必然的に結びつけていた(誤り)時代にできた概念だからである。多くの研究者が「オラリティとリタラシー」≡「聴覚モダリティと視覚モダリティ」と思い込んできた。音素は音によると思い込んでいたからだ。しかし、手話には音声がなく、したがってオラリティもない、言語ではない、と言った Ong でさえ、オラリティとリタラシーの二段階ではなく、オラリティも二段階(primary orality と residual orality) からなると言っている(Ong 1982)。音のない世界で生きるろう者のコミュニティーで自然に発生し、彼らの絆であり、文化的アイデンティティでもある手話は、オラリティと無縁に見えるがゆえに蔑視されてきたが、オラリティあってこそその言語であるという考え方が、手話の言語性を認めることの支障となり、リタラシーの前提となるオラリティすら手話には存在しないのであるとして、ろう者は完全な人間でないような扱いを受けることもある(Polich 1999)。文字のない言語は多数あっても、音のない言語は手話しかないと思われる。

一方、手話という言語はリタラシーを生み出すことが不可能だという思い込みも、ろう者・手話者を蔑視させる要因であった。先進国も含め、ろう者はこれまで手話を文字であらわす方法を発明・開発し、それを常用することはなかった。その理由は音声言語話者に取り囲まれているために、マジョリティの音声言語を、聞くことはできなくても、文字にしたものを習得することは必要であり、便利でもあるからである。(但し、その国・コミュニティーの言語が文字を持つならば。)もうひとつの理由は、手話は音声言語のように線状(linier)の構造ではなく、右手・左手・視線・眉上げ・頷き・姿勢などがすべて音素であり、それら複数の音素が同時に発せられるため、文字という二次元の紙の上に書く記号を開発することは困難であるからである。現在手話の記号(文字)化を試みている研究者もいるが、それは手話者の識字を念頭に置いているわけではなく、むしろ手話の国際比較や手話の分析のために開発されたものである。その一例である Ham-NoSys は記号が多く、複雑で、一秒ほどの手話表現に10個もの記号を並べなければならないこともある。このような記号はその手話固有の音韻体系に則したのではなく、想定されるあらゆる手型・動き・位置、そ

れにともなう視線・眉上げ・頷きなどの言語記号を表現できるものとして開発されているからである。

手話教本は DVD 付きで売られることが多いが、これは英語の CD 付きの教材と同じで、そのまま話すと人工的で自然ではない。何度も撮りなおして録画した手話教材はオラリティを表しているとは考えにくい。手話を記録するテクノロジーが出現してから、手話のオラリティにあたるものとリテラシーにあたるものの違いが顕在化してきたのではない。

手話の言語性を証明しようともせず、言語扱いしなかったことの原因は、音声言語話者の「オラリティ」という概念と「リテラシー」という概念の両方にある。しかし、20世紀後半、一部の言語学者が手話は言語であると証明してきたことは脳科学に裏打ちされた。オラリティとリテラシーの脳科学的な意味は角回 (angular gyrus) 等にあると思われる。文字を持たない民族の「角回」はどうなっているのか、を考えれば、モダリティとは関係のない「リテラシー」の真の意味が見えてくるであろう。

## 2. 研究の目的と方法

研究者の様々な理論からしても、一般の人々の直感からしても、オラリティという概念がゆえに手話の言語性が認められにくいことを筆者は実感してきた。オラリティとリテラシーは聴覚から視覚へのモダリティの転換がなければ存在し得ないのかをまず考察する。今や録画が簡単にできるようになり、ろう者の手話は記録され得るものとなり、自然な発話とは別に、手話の教本に載るような語・句・節・文が固定化されてきた。これはリテラシーではないのだろうか。本研究の目的は、第一に、オラリティとリテラシーという概念が手話にもあてはまることを明らかにすること、第二に、オラリティをモダリティと混同せず、見直すこと、第三に手話のオラリティ研究の成果をろうコミュニティ及びろう国際社会に提供し貢献することである。

ろう者の防災・減災に貢献するためにアジア共通の災害手話を開発する中で、自然な手話にはアジア各国で intelligibility があるものも多く、その理由として iconicity と CL (フリーズして語彙になる以前の手話) の存在があると推測できた。また intelligibility は、語レベルよりも、句・節・文のほうが高い。これは統語論レベルでの手話の iconicity (例「来る」「行く」の方向等) と固定されていない CL という表現に根拠がある。これらは日本では教育を十分受けられなかった高齢者による、記録を意識せず自然に発せられた手話に豊富であり、教育を受けた若者の、日本語に影響された手話には少ないと言われる。従ってこの iconicity と CL が手話のオラリティに貢献しているのではないかと考える。そこで研究方法としては、アジアのろう者たちの手話表現と iconicity の高いジェスチャーや、CL との相関関係を確認する。

つまり手話のオラリティと intelligibility に関係があると仮定し、それが従来の研究者の

いうオラリティと矛盾しないことを示していく。そして教育・文化によって固定された手話をリタラシーの概念で説明する。オラリティとリテラシーはモダリティに影響され、線引きされて二つに区別されたが、原点から視覚モダリティによる手話を題材にすることによって、それが二種類ではなく、段階的なものであることが示せるのではないかと考える。

最終的には研究の過程で得られた資料および知見を国際協力に携わる人や通訳士のトレーニングに活かし、アジアの連帯に貢献するリスクコミュニケーションをろう当事者に提供したい。

本研究でいう手話とは「日本手話」や「アメリカ手話」のようにまったく音声を持たないろう者が自然に生み出した手話のことで「日本語対応手話」や「手指英語」のように音声言語を手指で表したものではない。

今年度の共同研究では、フィリピンの手話を題材とした。カルバヨグのろう学校に学ぶ成人と児童およびタクロバンのろう者の教会に所属するろう者たちの手話、またダバオのろう者の手話を観察し、そのオラリティとリタラシーを探った。これらを資料として、次年度以降の文科省科学研究費補助金研究（特設基盤 B）では、複数の国の手話を収集し、上記の目的のために分析していく。

### 3. フィリピン手話の特徴とフィリピンにおける手話使用の歴史

FSL はフランス手話語族に属するとされる。というのもアメリカ手話の影響が非常に強く、アメリカ手話は最初のろう学校がフランスからの教育者の導入によるもののため、フランス手話の影響が強いからである。歴史的には初めてのろう学校が 1907 年にアメリカからの教師グループ (Thomasites) の手話者により設置され、その後長きにわたり、教育現場ではアメリカ手話が使われていた。しかし FSL は言語学的に独自の手話であると考えられる。1970 年代から 1980 年代にはアメリカ手話だけでなく Manually Coded English (手指英語、日本の日本語対応手話にあたる) が教育現場で正式に採用された。しかし FSL は言学校外では生き続けたと思われ、ASL からの借用はあるものの、言語学的に ASL の変種とは認められず、2018 年には法的にフィリピンの言語であると明記された。現在手話者の 54% が FSL 話者と言われる (Rafaelito and Martinez 2006)。

しかし、聴覚障害者の親のほとんど (約 90%) が聴者であり、その上障害者の就学率が低いと、正確な数字は不明であるが、手話を知らずに育つろう児は多いと考えられる。次章にもあるように、手話を母語として獲得している人は少ないし、その中には英語等の読み書きを学ぶ機会も十分でない人が多い。

オラリティとリタラシーという視点でろう者の手話を観察すると、完全な言語としての自然な手話を身に着ける前にリタラシーにあたる手話を先に教えられてしまうろう者が少ない。日本人で言えば、英語をしゃべれない、聞き取れないが、英語の読み書きはできるといった状況に似ている。そのような人は学校で英語の点数はとれても、実際に英語のネイティ

ブサイナーと話す（オラリティ）ことは難しい。ただ、問題はフィリピンの場合、リタラシーにあたるような手話も必ずしも FSL を獲得した人から習うことができていると言い難いことである。

#### 4. フィリピンのろう者の言語的背景およびその表現の特徴

本研究のために手話を観察したのはフィリピン中部レイテ島タクロバンのろうクリスチャンコミュニティとサマル島カルバヨグのろう学校（2018年8月）、南部ダバオのろうコミュニティ（2019年9月）である。レイテ島、サマル島では、貧しい生徒が多く、20代30代になってやっと学校へ行ける人も少なくない。その中には成人するまで音声は勿論、言語としての手話も完全に獲得したことがない人も多い。そのようなろう者たちの手話はホームサインに近いものが多い。一方、年齢の低いろう者の場合、学校に来るようになって、言語としてほぼ完成した手話を持っていると考えられる。後者の手話、すなわち記録しようとか、正しく教えようとかいう動機（これは音声言語のリタラシー教育にあたる）に縛られない、ただ表現したい、あるいはろう者同士で話したい、ということだけを考えているろう者の自然な手話はオラリティと考えてよいと仮定した。礼拝で使われる神父や助手役の手話は、あらかじめ発話することが決まっており、そこに現れる手話は文字で記録できるものと本質的には同じでありリタラシーにあたると思った。先に述べた日本社会事業大学の手話の動画で提出された修士論文の中の手話表現と同質と考えられる。もちろん神父の手話は美しいパフォーマンスの要素もあると考えられるが、再現できること、記憶に残す目的という意味で共通している。

都市ダバオでは、就学の状況はやや良いと考えられるが、手話を知らずインテグレーションで育ったろう者もいる。教育的背景はさまざまである。特別支援学校で、70年代、80年代に ASL および Manually Coded English を使用したことも大きな影響をもたらした。

以下では本研究のデータとした手話の特徴を把握し、話者の言語的背景に照らしたものである。例1は巨大台風の被災者に発災時の様子を話してもらったものである。例2～例4では、フィリピン手話の話せる日本人に言語的背景がわかる答えを引き出す質問をしてもらった。例1と例4はともに手話力と言う意味では同等と思われる話者であり、内容的に災害の様子を話すものと、自身の言語的背景を話す場合との表現を比較するために選んだ。下線部は CL、波線部はジェスチャーと判断されたものである。話者には研究のためであることを理解してもらい、発表の許可を得てあるが、話者が特定される画像、氏名、性別は記さない。

[例1] タクロバンのろう者の教会にて信者たちに巨大台風で被災したときの話をしてもらった。以下はそのうちの手話に堪能なろうの教師の話である。親は聴者であるが、子ど

もの頃から手話を獲得することができたろう者である。

私の名前は〇〇〇〇です。小さい頃からタクロバンで育ちました。

2013年11月8日に台風ヨランダが来た。ヨランダはY-O-R-A-N-D-Aで、11月7日の夜、自分の家は問題なかった。電気も有り携帯の充電もできた。雨が少し降って来て、TVのニュースを見るとフィリピンにハリケーンが近づいていると言っていたが、本当かジョークかわからなかった。でも台風の大きな雲が近づいてきているというニュースを見たら、たぶんフィリピンの北のほうに行くだろうと予想していた。

夜はそのまま寝て、次の日の朝、5時に起きたら外の天気が少し荒れ模様だった。5時頃風が強まっていたが、恐くなかった。6時、7時、8時となって、風が強くなり、雨も強くなり、死ぬのかと思った。足のかかとくらいに水が来て、水位が高くなって、トイレに行こうと外に出たら、家が壊れて水で流されてきたのを見てびっくりして家に戻った。家が流されてきて本当にバーンと3. 1 1（日本の東日本大震災）の時みたいに流れていてびっくりした。暴風雨で自分の家のまわりの家が壊れて流れてしまった。自分の家は壊れなかったが屋根からたくさん雨水が流れ家に入ってきた。何もできなかった。どうしようもなく水が入ってきて、足まで、膝までドバドバと浸った。10時、11時、12時で台風が止んだ。太陽が照り出したが、家の周りを見ると本当に壊れてなくなって壊滅状態だった。家の外に出られなかった。水があふれて水の中に家の壊れた破片や尖ったものがあって、水の中を歩くとけがをする危険があったので外に出られなかった。

水は膝の上、腰の下ぐらいまで来て、危なくて歩けなかった。お母さんが外に出るなどと言った。犬がたくさんいたので、犬を助けた。

その時の問題は水（きれいな）が出なかったことだ。次第に家の水（浸水した）はなくなり、床が黒くなって臭かった。・・・（解読不能）・・・。

水がないのが困ったがガスはあった。食べ物は缶詰を食べて節約した。寝るときは床ではなくテーブルに寝た。本当に汚くて臭くて、テーブルの上で寝るしかなかった。我慢した。

4日間、何をしたかという、ろう者の組織とコンタクトを取ったり、他の日本の組織デフ・カイビカンの人（代表者の名前）、知ってますか、その人にコンタクトを取ったりした。今回の災害でろう者で死んだ人はいなかった。しばらくして支援の人が来た。食べ物、水、缶詰、ろう者が支援してくれた。支援してくれた方がとう。

この手話は、手話に堪能な人が準備はせずに、しかしある程度フォーマルな場（礼拝のあとの総勢100人近い参加者の集会）で発した発話である。この中ではCLが頻繁に表れて

いる。特に災害の様子を表すときに生き生きした表現になっているところはCLが自然に巧みに使われている。その場にあるテーブルを利用して、その日の再現のような動きは手話とは呼べないジェスチャーと判断できる。準備をせず、思いつくままに話しているもので、シチュエーションとしてはオラリティの発揮されるシチュエーションであると考えられる。

次にダバオで、ろう者4人に同じ条件で話してもらったものから対照的なものを例として挙げる。以下の〔例2〕～〔例4〕はフィリピン手話のできる日本人のろう者がインタビューを行ったものである。例1とは違って、大災害の経験はないので、自己紹介と自分の手話等のコミュニケーションの状況や教育の経験を話してもらった。状況としてはインタビューと一対一で話すという状況である。

〔例2〕 上記〔例1〕ほどではないが、下記〔例3〕のろう者に比べると流暢ではあるが、〔例4〕のろう者に比べると、簡単な質問でないと話が通じないところがあった。

1964年生まれ。現在55歳。生まれ育ちともにダバオ。私は生まれたときは聴者だった。しかし、生後六か月後に高熱や蕁麻疹の病気を患って聴力を失聴し、ろう者になった。病気を患った際はマニラのマカティにある病院にいた。

学校では大変ひどい環境だった。幼少期の自分は手話が分からなかった。1975年に初等教育に通い始めた。ダバオ市のCalinanにある学校に入学。そのあとは転校し、ダバオ市のMagsaysayにあるSPED(特別支援学校)に通った。当時入学時はろう者一人だけであった。手話が分からなかったので、ジェスチャーでコミュニケーションを取るしか方法が無かった。当時の自分は他者と会話できず、意思疎通が図れず、ジェスチャーで悪い意味の言葉など一方的に示すことが多かった。

また、当時少しでも自分のお金が欲しいために路上で車磨きや、靴磨きなどを行っていた。家庭は貧乏ではなかったが。

1978年、当時マニラからろう者のMojica夫妻(旦那さんは、現在Davao City Special Schoolの教師)がダバオのろう者の状況を見に来た。同夫妻はフィリピンに最初に設立されたろう学校、“PSD”(Philippines School for the Deaf)の卒業生で、ダバオのろう者の多くが手話を習得しておらず、ジェスチャーであったために、ダバオの特別支援学校(Magsaysay)でろう者のために手話の習得支援を始めた。自分も夫妻から手話を学んだ。Good morning や boy, eat, tomorrow, ligh on off などの基本的な手話から学び始めた。彼らの活動のおかげで、当時のダバオのろう者は手話を習得することができた。当時の自分は手話が分からず自分の言いたいことや、会話が図れず、物を壊したりや、人をたたくなどして自分の感情や主張を表すことが多かった。とても悪い自分だったが、彼らが手話を教えてくれたおかげで、今の自分がある。

初等教育では英語、数学、理科など科目を学んだ。数学、英語はMojica夫妻が指

導をしてくれた。英語は基本的な単語や短い文であれば理解できる。過去形、現在形、未来形は分かる。長い文章は分からないので短い方が理解できる。テキストメッセージでの会話内容の英語。中高校も卒業することができた。1985年卒業。中高校は聴者学校でインテグレーション。電気関係の修理などに関することを学んだ。テストなどは全く分からなかったなので、聴者と一緒にカンニングをしてごまかしていた。

大学には進学していないが、卒業後はマニラで当時のフィリピンのろう者の団体、PAD(Philippines Association of Deaf)で仕事をした。PADでの仕事内容は、ピアスやイヤリングなどを作成して販売をすること。そのあと、様々な問題がありPADは解散した。ダバオに戻った後は、Rizal Special Education Learning Center(以下 RSEL C と省略)で警備の仕事をした。母親が RSEL C の校長だった。母は病気のために、二年ほど前に RSEL C を他の学校に売却した。管理者が変わっただけのみであり、特別支援学級は現在も残っている。

昔は家族とコミュニケーションを円滑にとることができなかった。母や弟、妹や親戚は聴者なので、会話をすることが困難である。いつも会話に参加できず孤独感を感じていた。だからいつもろう者の友達に会い、手話で会話を楽しむ時間が多かった。しかしその後、母が手話を学んだために、母と会話をすることができるようになった。後に母は RSEL C のろう児に手話の指導をした。

自分は1996年に結婚している。妻は聴者であるが、自分が手話を教えたので手話ができる。現在二人の聴者の娘がいる。二人とも手話は少しできるのでコミュニケーションは問題ない。

聴者とのコミュニケーションは、少し音声を使うことができるが、ほとんどは英語の筆談である。短い文章のみ。タガログ語やビサヤ語は分からないので英語のみ。補聴器を装着しているが会話時において補聴器を使用しても理解できないので全く意味がない。大声やクラクション、飛行機の音は聞こえる。会話のためではなく、バイクに乗るのでクラクション音など、危険を察知するために使用している。補聴器は無料で手に入れた。アメリカの Star Foundation から。毎年11月に来て、補聴器の確認をしている。

上の例は CL もあり、やや流暢に見えるが、インタビューをしたろう者によると簡単な質問でも答えられないときがあり、質疑は成り立たず、自由に話してもらったとのことであった。英語しか書ける言語はないが、メールの英文を見ると英語力は低く、単語を並べる程度である。

[例3] 以下のろう者の発話是指文字が多用されており、FSL に堪能とは言えない。1985年生まれ(34歳)であり、「3. フィリピン手話の特徴とフィリピンにおける手話使用の歴史」で述べたように、学齢期に手指英語が使われていた可能性がある。

生まれたときは聴者であったが、5歳の時に病気を患って失聴し、ろう者になった。失聴後、5歳の時は家族の話声は少し聞こえた。そのあとも家族との会話は少し聞こえる場面もあったために口話を用いて家族やいとことと話すことはあった。

幼少期に両親から口話の練習を受けた。口の動きを見せ、ABCDE…の発音の練習をした。また幼稚園時代にも園内でアルファベットの発音の練習を受けた。そのあとはずっと口話でコミュニケーションを取っていた。シンプルな英語とタガログ語の発音であれば上手く発音可能。タガログ語が分かる理由は、家族や親戚の会話はタガログ語であるため。日常的に英語とタガログ語の両方を使う。

英語は、聞こえないために、教科書などの本で学んだ。また発音などは、いところが教えてくれた。具体的に、のどに手を当てたりや、いところが聞き、正しい発音のチェックをした。英語の文法はシンプルで基本的な文法であれば理解できる。長い文章や深い内容だと理解することが難しい。

補聴器は使用していた。だが、補聴器を使用していたせいで学齢期には聴者生徒から、悪口などのいじめが少しあった。自分は補聴器を使用しているも彼らの言っている内容が聞き取れなかったが、雰囲気が悪口を言っていると分かった。

ろう学校には通わなかった。初等教育から大学まで聴者学校に通い聴者とともに授業を受けた。聴者学校内にはろうの生徒は在籍しておらず、自分一人のみであった。授業の内容は完全に理解できなかった。そのため自宅で、自分で勉強をしていた。またいとこや祖父が勉強を見てくれた。

席を一番前にしてもらった。先生が英語とタガログ語の発音指導を1年ほどしてくれた。

いくつかの大学を尋ねたが、ろうを受け入れてくれる大学は少なかった。Davao Doctor College はろう者を受け入れてくれたのでその大学に入学した。コースは Human Maj of Beachalor Hotel management and restaurant.

(大学の名前はドクターカレッジだが) コースが違うので医学とは学ぶことが異なる。両親や大学と話し合った結果、比較的簡単なコースを選んだ。ろう者が医学を学ぶことは難し上に、医者にはなれない。数学、サイエンス、英語、調理技術、マネジメントなど4年間学んで卒業した。

支援は、特になかったが、グループワークでプログラムや作業、プレゼンをすることが多かったので聴者学生に協力してもらうことが多かった。聴者とコミュニケーションを取る時は、ゆっくり話してもらいようお願いをしていた。教授たちは自分がろう者であることを知っていたので、自分がプレゼンなどで発言する時はゆっくりで良いと言ってくれていた。

ろう者に会うことはなく、手話も使わずに育った。初めてろう者に会ったのが20歳の時。高校に通っていた時に二人のろう者を同じ学内で見かけた。そして彼らの手

話を見て少しだけ学んだ。しかし、両親はろう者、手話に対して否定的であった。両親は自分が聴者と同じように話してほしいことから口話を使うことを好んでいた。現在両親は、手話を使うことに理解を示している。

両親はずっと手話はダメと言っていたが、大学を卒業する頃に、両親と話した。私は聴者ではないし、聴者の声を聞くことが難しい。またはっきり発音することも困難である。だからろう者であること、手話が必要であることを受け入れてほしい、と両親に伝えた。それから両親は理解してくれ、私はたくさんのろう者に会い、手話を使うことができた。ろう者に会い手話を使って会話することはとても嬉しかった。

以前、就職しようと仕事を探した。企業に申し込んで、インタビューを受け答えたが、どれも深い内容の質問であり私にとっては難しかった。結果的に不採用になった。他の企業に申し込んだが、話せない、プレゼンができないなどの理由から断られた。その他も申し込んだが全て断られた。当時、ダバオにオープンした G モールというショッピングセンターはろう者を受け入れていたので、そこに就職することができた。仕事内容は値段などのシールを作成して貼り付ける業務内容。数字の計算やスピードが求められる内容でした。しかし、長く続けることができず7ヶ月で退職した。現在は両親が仕事を持っているので、その仕事を分けてもらい、仕事をしている。内容はバッグやジュエリーなどをネットで販売するオンラインビジネス。フェイスブックなどに商品写真を掲載し、購入者とメールでやりとりや商品を届ける、または郵送すると言った内容の仕事。また両親はダバオ市の Mati に現在アパートを建設しており、2020年に賃貸としてビジネスを行う予定である。

自分は現在のビジネスで英語とタガログ語でやりとりができている、これからも仕事を続けて自立して行きたいと思っている。

以上の手話は、外国語として手話を使っているようなぎこちない手話で、CLと思われるものはほとんどない。発話の内容からもわかるように、親が口話主義でインテグレーションに入れられ、手話で育ってはいないため、大人になって覚えた手話であり、流暢ではない。指文字が多いがスペリングの間違が多い。[例 2] のろう者と同様書ける言語は英語のみであるが文法はあまり獲得されておらず単語を並べる程度である。

[例 4] ダバオ出身で言語獲得年齢の前に失聴しておりほぼ先天性のろうと言える。家族は皆聴者である。本報告書で挙げた例の中では [例 1] のろう者の次に手話が流暢であるが、[例 3] のろう者と同様学校では AS 1 と Manually Coded English を教わった世代である。

生まれた時は聴者だった。しかし生後9ヶ月に病気を患い、高熱の影響で聴力を失いろう者になった。当時、病気を患った際に多くの注射で薬を体内に注入したのも聴

力を失った一つの原因でもある。

当時家族がどこの学校に通わせるか探していたところ、Rizal Special Education Learning Center がろう者の生徒を受け入れていたので入学した。入学した歳は7歳。

入学後は、手話を習得するために勉強をした。8歳の時。手話の本などを用いて学んだ。8歳になる前は手話を知らなかった。学内のろう者教師が手話を習得するために支援をしてくれた。当時はASLとして手話を学んだが、たまに使う程度であった。

発音や口話の訓練はしなかった。いつもろう者のグループで固まり一緒にいてコミュニケーションを取っていた。聴者とは全く関わらなかった。

最初の1年は聴者の先生から指導を受けた。内容は手話。手話のアルファベット指文字や、Appleなどの簡単な手話単語のみを学んだ。そのあとはろう者のCornelio先生から指導を受けた。算数、英語、理科、の科目。

幼少期英語は全く分からなかったし、とても難しかった。単語は分かっても文法は全く分からなかった。簡単な英語は何回か使っていくうちに簡単な文法だけは分かるようになってきた。しかし、英語の全体としてのレベルは自分でもすごく乏しい。簡単で短い文であれば理解できる。長い文だと理解が難しい。

小学校と中学校の学年を終えた後に、大学を探したが入れる大学が近場に無かった。入れる大学は遠かった。そのため、地元のVacational、職業訓練学校に通い、ライトやTVなどの電気関係のコードプログラムや修理の勉強をした。その学校内ではろう者は自分だけであり、聴者と一緒に授業を受けた。

自分は教師が板書した内容をノートに書き写すのみであった。教師が言葉として説明したことは分からないため、全部理解できるとは言えない環境だった。その授業は午前中のみ。

ろう学校では試験は問題なかった。試験前に勉強はしたのでろう者クラスでの試験は問題はなかった。たまに難しい時もあったが、(ろう者クラスの試験は比較的簡単な内容だったと思われる)。時折聴者の生徒と一緒に試験を受けることがあったが、その時の試験問題はとても難しく、問題用紙の英語も理解できなかった。

学校内で、ろう者同士ならスムーズに手話でコミュニケーションが取れるが、聴者の中に1人だけろう者の場合は、コムにケーションが難しい上ろう者に対するサポートがないのが困った。

父は手話ができないため、筆談のみでのコミュニケーション。母は手話が少しできるが、筆談で会話をするものが多い。姉兄とは手話と筆談の両方でコミュニケーションを取る。声は家族内であっても使わない。正確な発音分からないので。親は声を使うことに対して強制はしない。外他者と会話するときでも絶対に音声言語は使わず、全部筆談でコミュニケーションを取る。

タガログ語は、簡単な単語のみ分かる。以前小中高学年の時にタガログ語の授業があった。

ろう学校時代小中高学年はずっとろう者のクラスメイトとずっと一緒に過ごしており、聴者と関わることはなく、聴者友達はいなかった。職業訓練校に入って初めて聴者生徒一緒の環境になった。しかし聴者とは全く会話をせず、一人で過ごす時間が多かった。授業のときは筆談で話すことはあったが、授業外のプライベートでは全く話さなかったし、遊びに誘われることもなかった。授業後は一人で家に帰るだけ。聴者学生とのかかわり方が分からなかったし、とても難しい状況で苦しかった。

ろう者の集まりが毎週日曜日にある。午後2時から夜遅くまで。毎週日曜日は決まってろう者と集まり、手話での会話をする時間を過ごした。

職業訓練校では電気の知識や技術を学んだ。二年間学んだ。そのあと改めて、大学を探した。マニラにはろう者のための大学があるのを知っていたが、マニラに飛び生活をさせてくれるほどの十分な費用が無かったため断念した。そして改めて同じ職業訓練校に入学し、コンピューターのプログラミングや修理などの知識や技術を学んだ。

そして2010年から2019の9年間、Rizal ろう学校のコンピューター技術のスタッフとして、学校内のコンピューターの管理や修理などの仕事をした。現在同学校の仕事は退職し、別の仕事を探している

大学卒業等の証明書を求められる。もし履歴書に大学卒業が無いと、雇ってくれる割合が低い。

大学卒業してない人も仕事をしている人はいるが、簡単な雑用業務棟で賃金が低い。自分も他のコンピューター関連企業にいくつか仕事を申し込んだが、どこも大学卒業基準を求められるため、就職が難しい。それに加え、ろう者は職場で筆談英語でコミュニケーションが取れない、またはコミュニケーションがとれるのかといった疑問を聴者が持つてしまうため、断られるケースが多い。

その反面、単純作業や電気の修理などコミュニケーションを取る必要が無い職場はろう者を雇ってくれるケースがある。

ろう者の問題は、小学校から高校までの教育を卒業しても、職業訓練校や大学に行けないろう者がいる。そのため、企業に仕事の申し込みをしても断れ、仕事が無いろう者が多い。

時折、例えば親戚や親戚の友達などをお願いをして、雇ってもらうろう者もいる。またカトリックの洗礼を受けた時のゴッドファーザーやその友人を經由して仕事を雇わせてもらうろう者がいる。普通に仕事を申し込んで、その企業の面接を受ける方法では、フィリピンのろう者は仕事を持つことができない。だから仕事を持つためには親族などのサポートが必要になることが多い。

大学は遠いためいけなかった。自分はコンピューターの勉強をし、仕事をする道を選んだが仕事を見つけるのは難しい。

自分は7歳のころにおもちゃの機械など分解して直すことに興味を持った。13歳

の時にコンピューターの勉強をしたいと思ったが、学べる学校が無かったので、本などで独学で勉強をしたが、英語が読めず理解できなかった。そのためいつも図や写真だけをみて理解していた。20歳ころから少しコンピューター専門の英単語が理解できてきた。

コンピューターの職業訓練校を終えた後は Rizal でコンピュータ管理、修理をする傍ら、ろうの生徒にコンピューターの使い方や知識などを教えている。多くのろう生徒はコンピューターの使い方が分からない。

自分が学齢期には教師がコンピューターを指導してくれなかった。常に自分で本を読み学ぶ、独学でした。

訓練学校でも教わることは少なかった(ろう者だから情報が入らなかった)ため、常に自分で本、グーグルや YouTube で調べ勉強をしていた。そして彼が学んだことをろう生徒に指導して還元している。

訓練校の授業料は 15,000peso (33,000 円) /1 年。一か月ごとの分割支払い。

できたら将来は他の国に出稼ぎに仕事をしたい。コンピューターや電気、どんな仕事でもいいので、お金を稼いで家族を支えたい

以上、例4では、前半は CL があまり見られないが、後半 CL が多くなる。また学校の授業での先生と自分の関係などロールシフトが巧みにできている。後半のほうが自然な、オラリティと呼べるような発話と考えることもできるかもしれない。

これらの例を比較して以下のことが言える。

流暢な手話者のオラリティ性の高い手話の特徴として CL が多いことが挙げられる。またロールシフトも多く見られる。都市部で教育を受けたろう者の場合、幼少期にろう者と接した人はかなり流暢な FSL を話すが、そうでない場合、特別支援学校(ろう学校)でも ASL や Manually Coded English を導入したため、完全な FSL が獲得されておらず、CL は少ない。インテグレーションだったろう者は、FSL も ASL も身につかず、英語の指文字が多く、かと言って英語も実は獲得されておらず指文字にも間違いが多い

今後は他のアジアの国の手話との intelligibility を調べるとともに native signers と non-native signers の比較、高齢者の手話と若者の手話の比較等を行うことで、手話のオラリティが存在することを確認していきたい。

おわりに

手話の理論研究では「音素」という概念を使うことは既に常識であり、手話の音素や音韻論の存在は音声言語と手話が本質的には同じ「言語」であることの証明でもあるのだが、「音」ということばが含まれていることに違和感を唱える研究者もいる。それと同様に「オラリテ

ィ」と「リテラシー」いう用語・概念、そしてオラリティからリテラシーへという理論は、手話研究においては違和感があるかもしれない。しかし、リテラシーが道具や技術により言語を記録できたり、発話者のメタ認知を促すものとするならば、録画の技術はリテラシーと呼べないだろうか。従来の理論研究はモダリティに惑わされて言語の本質を見ていないのではないかと考える。

今回の共同研究（2018 年度）では、フィリピンのろう者の手話表現を収集して、話者の言語的背景とその場の状況などから、オラリティとリテラシーを音、文字という表面的な記号に惑わされずに分析した。本研究は文科科研特設分野 B に引き継がれることになったため、本報告書では資料収集と発話の特徴を把握するところまでで、結論は保留とする。

この共同研究（2018）に限っていうならば、長じて学んで覚えた手話はリテラシーにあたるものが表れていると思われた。これは音声言語話者が長じて文字を中心に外国語を覚えた場合の発話と似た性質を持つ。CL は表れず、ジェスチャーで補われることもある。一方手話を母語とする人の、練習をしない手話表出はオラリティにあたると考えられる。この中には CL 表現が多い。またミサのときの神父の手話は（礼拝中のデータは取れなかったが）、決まったルールに従って表出されるものでリテラシーにあたる。ここでも CL 表現は豊かであった。

本研究はオラリティという概念そのものを研究するものである。音のない世界で生きるろう者のコミュニティで自然に発生し、彼らの絆であり、文化的アイデンティティでもある手話は、オラリティと無縁に見えるがゆえに蔑視されてきた。オラリティあってこそその言語という考え方が、手話の言語性を認めることの支障となってきた。しかしそもそもオラリティの本質は何か、「音」と必然的な関係があるのか。手話のオラリティを探ることで、オラリティの本質のみならず、手話の本質が見えて来ると考える。

#### 参考文献

- Aronoff, Mark, Irit Meir and Wendy Sandler, (2005) “The Paradox of Sign Language Morphology,” *Language*, 81- 2 (<http://www.ncbl.nlm.nih.gov/pmc/articles/PMC3250214/>)
- Fujii, Katsunori, (2015), “The Great East Japan Earthquake and Persons with Disabilities Affected by the Earthquake – Why is the Mortality Rate so High? — Interim Report on JDF Support Activities and Proposals,” *Report on the Great East Japan Earthquake and Support for People with Disabilities*, Japan Disability Forum (JDF).
- Kent, Mike and Katie Ellis, (2015), “People with Disability and New Disaster Communications: Access and the Social Media Mash-up,” *Disability & Society*, Vol.30, No.3, 419-431.
- Abat, Rafaelito M., and Liza B. Martinez (2006) “The History of Sign Language in the

- Philippines: Piecing Together the Puzzle”, Philippine Federation of the Deaf / Philippine Deaf Resource Center, Philippine *Linguistics Congress, Department of Linguistics, University of the Philippines*, January 25-27, 2006, 8 pages (PDF), retrieved on: March 25, 2008 (archived from the original on 2011-07-28)
- Meir, Irit, Carol Padden, Mark Aronoff and Wendy Sandler, (2013) “Competing Iconicities in the Structure of Languages”, *Cognitive Linguistics*. Volume 24 (2), 309–343,
- Meir, Irit, (2012) “The Evolution of Verb Classes and Verb Agreement in Signed Language,” *Theoretical Linguistics* 38, 145-152.
- Ong, Walter J. , (1982) *Orality and Literacy*, Routledge.
- Perniss, Pamela and Gabriella Vigliocco, (2014) “The Bridge of Iconicity: from a World of Experience to the Experience of Language,” *Philosophical Transactions of the Royal Society B: Biological Science*. 369  
<http://rstb.royalsocietypublishing.org/content/369/1651/20130300>
- Polich, Laura (2001) “Education of the Deaf in Nicaragua,” *Journal of Deaf Studies and Deaf Education*, 6-4
- Taub, Sarah F., (2001), *Language from the Body: Iconicity and Metaphor in American Sign Language*, Cambridge University press.
- Ong, Walter J. 1982. *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*. London: Methuen, pp.31,